

娘から母への手紙

拝啓

暑さ厳しき折、梅雨も明けて間もないですが一雨欲しい今日この頃。母上様もご多忙のことと存じます。

なんて。

堅苦しい手紙なんてお母さんも読んでいて苦痛に違いない。と思い、普通に話し言葉で書き列ねていくよー。

どうも。=一度でいいから見てみたい、自分の息の根止まるところ明里です！  
いやー、学園での生活は相変わらず不便です。

なにが不便かというと、時間には縛られるし、研究機関には行動を制限されるしで……それ以前にも話した、私が力を貸している=第一研究機関=で一つの決まり事があつてね。

——新人類と旧人類の友情は成り立つか。

……どう思う？ちょっとお馬鹿なんだよね！ =成り立つに決まっている=のに！

けど機関の言いたい事もわかるんだよね。新人類は旧人類に駆逐されたわけだし……仲良く共存共栄していける事が証明出来たら、今みたいに新人類を弾圧する動きも無くなつて。みんな仲良く暮らしていける世界になれると思うから——私は世界のために、自分のやれる

事をやろうと思う。

じゃあ、今回はこの辺までにして。またね、お母さん。

『暑熱耐えがたきこの頃、くれぐれも『自愛のほどを』

### 太陽明里の【問題提起】

「母親への手紙?」

白を基調とした洋風の校舎。その色が持つ性質上、朝日を淡く反射している。

地面は、廃タイルであるタイルセルベンを使用したクールアイランド舗装。猛暑日には一般舗装と比べ、10度近く低くなる。

この地面もまた若干、白色であつた。そんな、まさに白で統一された学園内で一人、顔を曇らせる男がいた。

二学年の生徒である証。その青色のネクタイが重力で垂れ下がる形になる姿勢——前屈みになりながら顎先を撫でつつ佐久間帝は先の言葉を呟いた。

目の前にいる小柄な少女が、猫のシールを貼ったピンク色の可愛らしい……帝からすれば目に痛いだけの要素でしかない封筒を持って、得意気に見せてきたからだ。

「そうです、郷土にいる母親への愛情が溢れたとても素敵なお手紙です」

自ら書いた手紙を『素敵』と言ひきる彼女の名は、太陽明里。

明里は、自身の手の平より少し大きいサイズの封筒を帝の顔に向けてかざす。明里の頭は、身長が180cm近くある帝のヘソにすら届いていない。そのあたりからも彼女のミニマム工具が見てとれた。

そんな小学生並みの背丈をもつ明里が、一生懸命背伸びをして高々と——それでも帝の顎あたりだが、開封した封筒の中身を突き出す。

「……家族への手紙は、他人へ積極的に見せるものではないと思うが？」

帝はとりあえず手紙を受け取ってみるが、読むことはせずに確認をとる。

「見せるものではないかもしれないけど、見たいとは思わない?」

「返答になつていないな」

帝はため息を一つつき、整髪料で固めたツンツンの髪をくしゃくしゃと搔いた。

帝が頭を搔くのと同時に遠くの方——校舎方面から微かに鐘の音が聴こえてきた。鐘を衝いたものとは違い、少々電子的な音感がするアレは、間違いなくHR開始5分前を予告するチャイムであろう。

いよいよ明里の無駄話に付きついている場合では無くなつた。このままではHRどころか1時限目の授業にまで遅れてしまう。

「この話は後にして、まずは学校に行かないか？　このままだと確実に遅刻だ」

「それは大変だっ！　早く文面を確かめてその後、ダッシュで学校へ行きましょう！」

……どうやら手紙を読むという役目から逃す気は無いらしい。

そうとわかると、帝は手にしていた——これもまた、封筒と同じく目に痛いピンク色の便箋を顔のすぐ前まで近づけ、速読をする。



「これは……」

「どうですか!?」

「……どこに愛情が溢れているんだ?」

帝はてっきり涙腺が緩むような感動必至の内容かと身構えていたのだが、手紙の内容は明里自身の近況連絡であった。

読み飛ばしたかと思い、もう一度読み返すが、特に愛が溢れている内容には読み取れない。どこか無理矢理当てはめるというのなら、ここ最近の猛暑を気遣つてているくだけが当てはまるかもしれないが。それに文頭に拝啓を置いているのに、文末には敬具が無い。

とにかく、受け取る側の母もこの手紙を見て涙する事はないはずだ。なにか思う箇所があるとするとなるならば、やはり敬具が足りないというところだろう。

「特に思うところはない。完璧な文面だ、よし学校へ行くぞ!」

ガシッ、と走り出そうとする帝の腰を明里が後ろから腕を回して捕獲した。

「思うところはないの?」

明里が上目遣いで帝を見つめる。

太陽光が反射し、例えるならば金波銀波の海に匹敵するほどに眩耀する明里の瞳に、帝の脳・胸、どちらが先か。高鳴る。

帝と明里は、研究機関の指示でよく共に行動をする間柄となつた。帝がパートナーとなる

彼女を初めて視認した時は、普段から無神論を唱える身でありながらも、神に心から感謝をした。感謝します、神様、アーメン。と。

しかし現実はそう甘いはずもなく、目の前にいる……およそ、これまで帝の生活では見たことがないほどの美少女は、唐突に、帝の幻想を打ち碎いた。

『えー……こんなのとペアを組むの?』

この瞬間、帝は一生無神論者でいる事を誓つた。勿論神にではない、自分自身にだ。自分で、もう信念を曲げることはしません。アーメン。

過去の出来事を想起している帝を見据えていた明里がハツとする。

「もしかして初めて会った時のことを思い出してる? だからあれは違うって言つたよね?」

「……わかつてるよ。友達のアドバイスだったんだろ?」

「そう! =これを言っておけば優位に立てるから=って」

「優位に立ちたかったのか」

「だから……あの時は私も緊張していて、咄嗟に出たのが直前に聞かされたそのセリフで」

そう言うと両手の人差し指をツンツンと合わせ、視線も下に向ける。

帝から見ると、頭を下げた明里は、髪の毛に覆われた=何か=にしか見えない。明里の髪は腰よりさらに下、ひざ裏にまで届く超ロング。前髪は横に揃えられており、現在垂れ下がっているソレはまさに簾そのものだ。

「まあ、なんだ。怒っているわけじゃないからとりあえず顔を上げてくれ」

その言葉を受け、恐る恐る面を上げる明里だが、その表情は帝が想像していたのとは正反

対で、笑顔であった。

「それで、肝心の内容についてなんですが」

「……内容については特に話をすることもないが」

「あるじゃないですか、『研究テーマ』についてですよ！」

その言葉で思い出す、<sup>ミ</sup>旧人類と新人類の共存は可能か<sup>ミ</sup>明里の手紙では共存の部分が<sup>ミ</sup>

友情<sup>ミ</sup>と置き換えていたが、現在第一研究機関で行われている研究は生徒の協力を得てのものであるから、友情でも語弊はないかもしれない。

しかし明里とペアを組んでいる自分だ。研究内容だって彼女同様に把握している。今さら改めて話し合うことも無いはず。それに今は時間が惜しい。今しがた、微かに聞こえたがあの電子音はHRの始まる音だろう。1時限目は遅刻だ。ここは腹をくくって明里の話にとことん付き合ってやることに決めた。

「今さらなにを話すっていうんだ？」

ようやく食い付いたとばかりに、ロングの黒髪が地面に付くほど満面の笑みで体を反り返す。謀らずともスカートの中が見えそうになるが、帝の身長では角度的に目視は不可能であつた。いや、精力的に見ようとしたわけでは決して無いが。断じてない。……本当に無いんだ

から！

「では再確認しますよ？ 私たち新・旧の人類間で共存は可能ですか？」

「それは……だな」

言い淀む。確かに現在進行形で新人類は旧人類に<sup>ミ</sup>管理<sup>ミ</sup>されている。これを<sup>ミ</sup>共存<sup>ミ</sup>と言えるほど帝は厚顔でも考え無しでもない。

明里も以前、旧やら新やらの区別が厭わしいと憤慨していた。今も自分でそう発言しておきながら、厭惡の念が生じているのだろう表情からは笑顔が消えている。

「出来ない……とは言わないし、かといって出来るとも断言出来ない」

「そこは名言しようよ確言しようよ直言しなさいよ！」

「どうした途中でテンション上がったのか!?」

「ごめん。少し興奮しちゃった」

「知ってるか？ 直言って大体目上の人に対して使う言葉なんだぞ」

それに歳は帝の方が一つ上だ。留年して、明里とは同学年となつていて。度々、明里の発話が敬語混じりであつたりタメ口であつたり、話法がおかしいのはそのためだ。

「じゃあ、最後にもう一つ帝さんに問題を出します」

「問題？」

「そう。直感で答えてもし、熟考して答えてもしです」

「……よし、言つてみろ」

遠方から二度目の電子音が奏でられた。とうとう1时限目が始まつたらしい……。  
明里は学校指定の四角い濃緑色の鞄から——用箋として愛用しているのであろう、先に細見したものと同じ、桃色の便箋を取り出した。

「では帝さんに質問です」

そう告げてから便箋に、青色のカラーペンで二体の棒人間を横に並び描き始める。

片方には『旧人類』もう片方には『新人類』と名をうつた。どちらの棒人間も、上部に引いてある波線に向けて片腕を引っ掛けている。

「これは……崖か?」

「そうです。そしてこのドラマチックな絵が質問の内容です」

「なるほど、わからん」

「仕方ないですね……」と不満を口にしながらも、明里は楽しそうに便箋の棒人間へ新しい線を付け描いてゆく。

数秒後、絵には棒人間A(旧人類※わたし)と棒人間(新人類※みかど)と注釈が加えられ、崖の下には棒人間の倍はあろうかという鋭角な剣山がドクロマークと共に描き増やされた。

「落ちたら間違いなく死ぬな」

「もちろん。グッサリですよ、さてここで問題」

『目の前で崖から旧人類と新人類が落ちそうになつていています! 帝さんが助けられるのはどちらか片方だけ! さあどちらを助けてますか?』

「ああそういう『抓か……』といふか『新人類※みかど』って俺も救い出される側なんだが』

『そこはわかりやすいように人物を当てはめただけです! 気にしないで回答してください』

『いっ』

「余計な情報を入れると、逆に不親切な効果を生むんだぞ』

とまあ、愚痴を溢す帝ではあったが、この体の『抓はわりとありがちなものだ。

この二択が母親と恋人であつたり、妻と子であつたり。組み合わせは様々だが共通しているのは『どちらか片方しか助ける事が出来ない』という条件だ。

段々と暑い季節になってきたとはいえ、吹き抜ける冷気が夏服の袖口から入り込めば未だ、感覚的な肌寒さを感じる。

ひらひらと寒風を受ける便箋の絵を見ていると、まるで凜冽たる寒波の中、真下には高波に踊る海神。そしてなぜか巨大な剣山。明里の言う通り、崖に指の第二間接を引っ掛け、必死にはい上がるうとする自分達一人の情景が頭に浮かんだ。なるほど……中々にしてドラマチックな、一大スペクタクルだ。

「この類の回答で解答はないだろう? まさか『自分を犠牲にして私を助けてくれる』なんて

甘い幻想を抱いているわけでもあるまい」

「うーん……それはどうでしょう」

明里はやはり楽しそうに笑顔を絶やさない。いや、絶やさないつもりでもないのだろう。

ただ自然に、無意識で年がら年中笑顔なのだ。笑顔で世界が平和になるのなら、この少女は一年に何人の人々を救っているのだろう、見当もつかない。

「なにが楽しいのやら……じゃあ俺の答えを言うぞ」

「はい……」

明里は生睡をのむ。なにを緊迫する場面でもないのに、と心の中で思う帝だが、ここでツッコミを入れても話の腰を折るだけだ。テンポは大事だと、回答を口にする。

「俺の答えは——無しだ」

「ええー！　ずるいですよー!?」

「知らん。押し問答がしたいのなら他のやつにあたるんだな」

不服な面持ちの黒ロングを見遣る。あまりだんまりしていれば、とやかくと矢継ぎ早に質問が跳んで来る可能性も否めないので、こちらから借問することにした。

「で、お前ならどうするんだ？」

「え？」

「人に聞くからには自分でも熟思したんだろう？　それを教えてくれ」

明里は顎に握り拳を添え、白タイルの地面へ当てもなく視線をやる。一見、沈思默考しているよう見えなくもないが、これはボーグだろ。自分の答えは、問答の前に出しているはずだ。

明視されている事に気がついたのか、帝を一瞥すると再び笑顔になり、姿勢を正す。

「私の答えは……」

「答えは？」

生睡を飲む音がした。帝は一瞬考えたが、それが自らのものだと気がつくと少々可笑しい気持ちになる。

「私の答えは——『一人とも助ける』です！」

「はあ？　つざけんなっ!!」

『どちらか片方しか助けられない』という前提条件を完全に無視した発言。

得意気な顔をする違約者を目の前にして、呆れて物が言えないとはこのことだと身をもつて感じる。

「それは卑怯だ。それが良いなら俺だつて」

『俺だつて』？　ちなみに「人を助けるには救い出す者の命に危険が及びます」

「なんだそれは？　それなら……」

「それなら『助けるのを止めますか？』

「ぐつ……」

口淀む。それは自らの安全を第一した保身的な考えを読みとられたからではない。眼前の少女の、初めて見る炯炯とした眼光。それに全てを見透かされたような、同時に動物の本能として根幹にある恐怖心を煽られたためだ。

咄嗟にとつていた自己防衛の所作、相手を見据えながら後ろに下がるという行動。やはり天真爛漫な彼女も人間たる根幹に、怒氣やそれに呼応した威嚇だって無論備わっている。気づくと明里はまた笑顔で、こちらをいつもの優しい双眸で見つめていた。

「それで？ 帝さんのファイナルアンサーは？」

「俺の最終的な答えは……知らん」

「ええー！？ やっぱりそっちの方がするいよー！」

「うるさい、もう行くぞっ」

返事を待たずに帝は学舎へ向け歩き始める。

さつきの回答、あれは嘘ではない。答えが出なかつた、だから知らない。わからなかつた、どちらを選ぶか。それとも自己を犠牲にしてどちらも救い出すか。

その判断はその時にすればいい。元々正しい解答なんてものはない、いやらしい問題だ。簡単に自分を犠牲に出来る者が優しい。出来ない者が勇気が無い、と責められるものでも無い。どちらも正解であり、不正解。それぞれが自分なりの答えを持てば良い。自分はそれを

保留にしただけ。時間がある時にでも考えてやるさ、明日の朝飯の時でも良い、もつと後、数十年後でも。

「待つてくださいよー」

後ろで呼び止める明里を顧みることもせず、帝は歩を進める。

「待つてくれないと酷い目に合うことになりますよー！」

「それは……面白い冗談だ」

面白い。とは言つたが、遅刻という現実が段々とその身に押し寄せて来た帝の表情は、數十分前と同じで。白の壁、白の地面に、淡い日の光に溢れた世界で一人だけ暗いものであつた。

## 殺風景な建物

佐久間帝は憤っていた。

それは、あれだけ良好であった天気が矢庭に大崩れしたせいで、身体がずぶ濡れになつたからではなく。遅刻の罰として、日直と掃除当番を任せられた事が原因でもない。

帝は不機嫌の原因となつた人物を、レンズ越しに睨み付ける。

『さあ本日の道徳。授業内容は『新人類のレゾンデートル』についてだ』

刺し殺す勢いの死線。もとい視線を受けてるのは初老の男。男は講壇に立ち、緑色の黒板へカツカツと白い石灰を走らす。

丁寧な楷書。達筆。『墨痕鮮やか』という言葉があるが、チョークの鮮明なあとを見ると、石灰痕鮮やかな板書『』という言葉が自然と頭に浮かんできた。

字を見てその人を知る……板書された文字を見れば、この教師——王大恵の人となりも知れようというもの。体格は、成人の平均身長より5cmほど高い帝が、更に見上げる2m。オーダーメイドのスリーブがその恰幅のいい風采を包み、見栄えしている。

顔は眉間に皺、鋭い眼光。そして嫌でも目につく見事な驚鼻。どれをとつても王大の威厳を演出するに足る素材であった。

驚鼻が気付くまで睨みを続行する帝の眉間に疲れが溜まってきたころ、ようやく両者の視

線が交差する。

「おや……佐久間帝。教師を睨み付けるとは優良な態度とは言えんな」

「……」

「どうした？似合わぬ眼鏡など付けおつて。まともに授業を受ける気がないのなら意味を成さぬが」

「……真面目に授業は受けてますよ、王大先生。ちなみにこれは睨んでいるのではなく、真剣に話を聞いている結果少々目付きが悪く見えたんだと」

「……まあよい。新人類に付き合つても時間の無駄にしかならん」

「どうぞ授業を進めてください」

フレームの黒い眼鏡を着用した帝が、その位置を指で押し上げて修正する。

今のは会話一つをとってもわかるとおり、帝は王大を氣に入つておらず。また、王大も同様に帝を……いや、新人類そのものを嫌つてゐるようだ。

周りの他生徒達も、二人のやり取りは見慣れたもので。道徳の時間恒例の、口論以下な軽い挨拶『』はクラス名物の一つになつていた。

乱れ一つ無いオールバックを搔き上げ、王大は真っ黒な装丁をした閻魔帳を取り出す。

『このクラスは人類と新人類の割合が半々……他のクラスと比較しても新人類の数が多いと言えよう』

王大はゆっくりと眼球を左から右へ動かす。改めて何かを確認しているようだ。

確かにこのクラスの新・旧人類の割合は二分されている。それは何者かの意志が働いたものではなく偶然だろうが、帝をはじめとする新人類、そして遅刻の要因となつた太陽明里は、旧人類側だ。

王大は闇魔帳を大袈裟に閉じ、軽い咳払いののち、もう一度教室内を見渡した。

「太陽明里、君は新人類に対してどういう印象を抱いている」

急な質問を受け、明里は大きな目をさらに大きく開けるが、数秒虚空に目を遣ると真っ直ぐな視線を講壇の教師へ向ける。

「はい。私よりうんと賢くて、運動も出来て。尊敬出来る同じ人類です」

『同じ』という部分をはつきり強調し、他生徒なら目を合わせ事も憚る王大の眼力をつゆともせず、連れのない態度で言い放つた。王大は片方の眉をつり上げるが、すぐに余裕を持った表情へ戻す。

「なるほど。君とは私が担当する第一研究機関でも、接触する機会はあるが……」

そう呟くと、髪飾りを撫でてまじまじと明里を注視。と思えば、ギヨロツと目線のみを帝の方へ動かした。

「佐久間帝、こいつと一緒に一組で研究に当たっているんだったな」

再度目線は明里の元へ。

「どうやら純粹が故にはだされてしまつたらしい」

今度は明里が片眉を上げる。王大の発言の『何か』が感に障つたのだろう。椅子から立ち上がり、くびれの無い華奢な腰に右腕の拳を添えた。

「ほだされた？」

「そうだ。新人類にアてられたのだ、なに……少し離れて生活すればすぐに良くなる」

「アてられた？ ハッキリものを宣つたら如何ですか」

「粗暴な言葉遣い……これは間違いくそこのやつの悪影響だな」

「王大先生のステレオタイプなものを見方、変えた方が良いですよ?」

「思潮は私と同じだと思うが」

「排他的です。セクト主義は教鞭を執る身としてどうかと思いますけど」

「心外だな。博愛主義なんだ私は……少々右翼的かもしけんがね」

「自己分析出来るんですね。ちなみに極右ですよ完全に」

「類概念と種概念の違いだよ。それに君は我々教師からも囁きされている、これ以上は気を抑えて欲しいところだがね」

「そうですね。あつ、卑見を申し述べますけど、このクラスのモットーは『人類みな人類』なので。どうぞ頭の片隅にでも置いてやってくださいね」

「……いいだろう」

王大は余裕を持った表情のまま、手にしていた闇魔帳を懐へ戻した。と、同時に午前最後の授業の終了を知らせるチャイムが鳴り響く。

「起立」

罰として日直となつた明里が、その職務を全うすべく声を上げる。

「礼」

王大は不敵に微笑んだ。

礼の合図で生徒達が頭を下げる中、二人の生徒だけは直立のまま自分を睨み付ける目を逸らさなかつたからだ。

※※※

「真剣な顔をすると表情筋が張つて痛いなあ」

「普段から貼り付けてる笑顔の方が表情筋使つてるとと思うんだが?」

「……授業潰して悪いことしちやつたな」

「気にすることはない。クラスの皆はさつきの口論の事樂しそうに話していたし、王大も旧人類には滅法甘いからな。笑つとけ笑つとけ」

帝と明里の二人は共に第一研究機関へ来ていた。食堂の券売機が故障しているようだつた

ため、お菓子の買い置きがあるこちらへ出向いたという次第だ。

第一研究機関施設の外觀は目立つた特徴も無い、校舎同様に白で塗られた——壁にカードキーのスキヤナが付いていなければ、どこが出入り口かわからない。清潔感はあるのにどこか野暮つた。そんな建物であった。

四角く一階立ての、将棋盤を白塗りにしたイメージの平べったい建築物。その側面に取り付けてあるスキヤナへ、明里は自分用のカードキーを通した。

ピー、とやや高い単調な電子音が鳴り、同時にドアが横へスライドする。中に踏み入れてすぐに指紋認証。次は網膜認証。最後に声紋認証を済ます。

エアシャワーで埃などを落としてから、アルコールで手洗い。【整理・整頓・清掃・清潔・洗浄～5Sを守ろう!】と表記されたポスターが壁に貼つてある。ここはどこぞの食品工場か。お菓子のためにここまで手間をかけるのも迷つたが、そこは伸び盛り。お腹の虫が執拗に警報を鳴らすのだ、蛋白質と脂質が取れないなら糖分だけでも取れ!と。

帝は腹の虫を黙らせるように空腹を我慢する下腹部を押さえ、施設内に設置されてある休息室へと足を急ぐ。

蟻の巣、とまではいかないが、エアシャワー室からドア一枚抜けた先には迷路と呼ぶに相応しい、いりくんだ通路が広がつていた。直角に交差する道は碁盤の目のようで、分かれ道がある度に貼り付けてる施設内地図が無ければ出口に戻る事も難儀だろう。

突き当たりの見えない道を、幾度か現れる分かれ道を無視して一直線に進む。

目的地の休憩室は建物の中心に位置するので、真っ直ぐ歩を進めれば迷う事なく到着する事が可能だ。

「相変わらず人の気配が全くしないな……」

帝は分岐点の都度、横道を見通すが、人影の一つも見えずカツン、カツンという二人の歩く音だけが屋内にこだまする。この第一研究機関施設を出入りする生徒や研究员も珍しく、今も帝と明里、他数名の生徒が足を運ばなければまさに門前雀羅を張るありさまだろう。

「建物の外観だけじゃなくて、中も真っ白なんだもん。もう少し色味が欲しいよね？」

「せめて床は黒系で染めてくれたら落ち着くんだが」

「壁はもっと明るい色が良いなー。こう、ベンキを塗った刷毛を壁に向かって思いきり振つたように派手な——ツツ」

明里の足が止まる。

「どうした？」

急に立ち止まつた明里を氣遣う帝、だが明里から返事が無い。振り返ると、彼女の口元は震え、瞳孔が開ききつている。普通ではない。その表情は、声を出さなくとも異常事態を告げていた。

明里の視線はたつた今通り過ぎた横道に注がれている。帝もその線を追い、続くその先へ

と目をやつた。

「ツ！？　おい、あれって……」

覗き込んだ通路の奥。真っ白な壁には、刷毛に赤い塗料を含ませ振りかぶつたような火花のように朱が飛散し、

同じく真っ白であつた床は赤黒く染まり、

——その、赤黒い血溜まりの中には、明里と同じ制服を着込んだ——少女の死体があつた。

## 妖精ＶＳ妖精

気付いた時には走り出していた。

「一番にいったのは明里であつたが、一番手の帝が追い越し、先に駆け寄つた。

「おい！おい！」

通路内を反響し、耳をつんざくようなけたましい怒声にも似た掛け声を血溜まりの中の少女へかける。

身体を揺らす事はしない、が、=生きている=事が前提での配慮は無意味だった。手をかざす事による眼球動作……反射も無く。息もしていない。決定的だったのは脈拍を確かめた時——希望の灯が、消えた。

「時間回帰!!」

絶命を確認した瞬間、帝は上着の胸ポケットへ手を入れ、小型の信用携帯端末を取り出す。画面左上部には=圈外=の文字と電池残量が満タンであることを教える表示。

スライド式であるその携帯電話の画面が、タイプせずとも帝の号令に同調するように発光し、リリリリ……と目覚まし時計のような音が膨れ上がり、鳴り響く。

ディスプレイの電池残留の表示、三つに区切られたそれの中の一つが消えた事と時を同じくして、【死体】の周囲に七色七つの球状の光が出現した。

「帝さんっ」

「緊急事態だ！=時間跳躍=する！」

【死体】の周りを衛星のように回っていた七つの光が、それぞれの色味を増しながら爆発するよう、【死体】周辺を覆うよう破裂した。

「ひいっ！……あれ？」

死体があつたその空間、その場には、顔を守るように腕を交差させ、=無傷=で悲鳴をあげる【死体】の形態が。

壁に飛嫡した血も、地面を赤黒く広がっていた血溜まりも、全てが消え、おそらく元通りなのであろう真っ白な壁床の姿がそこについた。

「君は、一体何があつた？……どうして……血だらけで死んでいたんだ？」

帝の問いを受けた少女は、跳ね返りの多い髪を搔き、周囲の確認をしたまま未だ状況を把握出来ていらないらしい。

「あ、あの男は……」

「あの男？」

少女は思い出したように身を縮める。

「アイツに！アイツに殺される！」

「アイツって誰なんだ!?」

それに、既に一回殺されているとツッコミを入れたかったが、この緊迫した場面で野暮な事は言つてられない。

異常な程に怯えるのも仕方がない、事実殺されたのだ。身体を切り刻まれ、その後に命を落とした。死の恐怖を超えるものは無い。あるとすればそれに至るまでの苦痛であろうか。

明里が一步、前に出る。

「あなた、その赤いリボン……1年生ね。嫌だと思うけど、なにがあつたのか教えてほしいの」「私の方から話をしよう」

男の声が通路内を反響する。

一本道である通路の両側を確認しても声の主の姿は無い。

『ああ、すまない。そちらからは見えなかつたか』

「おい、この声は——ツツ」

一刹那、風籠<sup>ふうろう</sup>が轟く。響めくような轟音、胴鳴りと間違うが、これは……

帝は、自分が知つているオノマトペのどれもが当てはまらない、圧倒的な轟音を身体にぶつけられた。

もと来た道が、一刻の内に吹き飛び、表面は白い壁の中身が黒い中身と共に切り刻まれ、燃え盛る炎を纏つた暴風により爆発した——それは『爆発』としか例えようのない、エネルギーの奔流。

すくみそうになる足に右手で渴を入れ、猛炎に向かいゆつくりと歩み近づく。  
「これは……お前の妖精か？」王大

『教師を呼び捨てか、新人類』

噴煙に似た黒煙から、現れたのはスーツ姿。返事を聞いて予感が確信へと変わる。鷲鼻、威圧感——現れたのは、

「そこ」の新人類の女、確かに死を確認したが……太陽明里、佐久間帝、どちらかの妖精の能力か

「生徒に手を出すとは、本当のクソ野郎だったか王大。+人殺しとくれば人間としても終わつてるな」

「人類ですらない者に人間性を否定されるとは……愉快な事だ」

残炎が起こり出る中、二人は近づいていく。数秒もしたら、数十cmの距離。対峙する二人の瞳には炎が映り込み、片方は怒り。もう片方が映すのは怒りにも似た拒絕。

帝の傍に駆け寄ろうとする明里を、帝は一睨みで制止させる。

「危険だからお前はそこにいる。こいつは……狂つてる」

「同感だな。太陽明里、君は下がつていなさい。さもないと命を落とす事になる。そこの女みたいにな」

王大が目を細め、死体であった少女を軽く一瞥する。



少女は、逃げた。命を脅かす驚異から。逆方向へと転びながらも、不恰好に走り出していた。

「そうだ、そういえばアレが生き返った理由を教えてくれないか」

「王大、人に質問する時の態度つてもんを知らないみたいだな」

「お前と太陽明里、どちらの妖精だ？」

「教える義理なんて無えよ。質問はこつちがする……あの子を殺したのはお前だな？」

「死者を蘇生させる能力……非常に珍しい」

「聞いてんのか？　こら」

帝が右ストレートを王大の腹に向けて打ち放った。が、後方に吹き飛んだのは帝の方。強風に煽られ、背中を強打する。

「野蛮だな新人類。私だからこそ無傷で済んだ」

帝はよろめきながらも立ち上がる。

が、見かねた明里がその前に躍り出た。

「明里！前に出るなって言つたろ！」

「ごめんね？帝さん。帝さんの妖精さんは戦闘向きじゃないよね……はは、ただの学生が戦闘向きか否かを語るなんて、変な話だね」

「よせ、やめろ」

「私には妖精さんが二人もついてるんだよ？　少し物騒な能力だけど、こんなビンチな展開

だけど……」

帝の制止を振り切り、王大に向かって一步、また一步と進む明里。走り寄つて力づくでも止めたい帝だったが、身体が動かない。どこかをやつたらしい。

妖精を使って健康な状態にしようとも考えたが、日に三度しか使えない能力。この場で王大を伐つには考えて使う必要があつた。

「大丈夫、私たちまだ修学旅行があるし……あれ？ 学園内からは出られないのにどこへ旅行に行くのかな？」

くすり、と笑う明里。帝は嫌な予感がし、自らの妖精の使用を決断する。

「けど、まずは手紙だね。完べきな帝さん監修のお手紙をお母さんに届けるの」

「明里……ッ！ トラベルマシ——」

『太陽明里、いってきますっ』

帝の時間回帰が発動する前に、明里が飛び出した。背中には白く巨大な翼が生え、速攻で王大の頭上まで届く。

同時に帝が再び王大の前に出現した。さすがに王大も驚きを見せるが、それは眉一つ動かす程度の反応にしかならない。

『太陽明里に翼が生えて飛んできた、これは理解出来るが……』

突如目の前に、それも怪我どころか転んだ際に出来た服の汚れすらも完全に無くなつた状

態の帝を見て、怪訝を表しているのだろう。王大は眉間に皺を寄せた。

「佐久間帝。お前は死者蘇生、だけではなく、瞬間移動や他の能力を持つ妖精も所持しているのか」

質問には答えずに、帝は再び右ストレートを繰り出す。時を同じくして、王大の頭上から炎の塊が降り注いだ。

先ほどみたく帝が後方に飛ばされる事は無かつた。今度は炎弾を避けるために王大が風に乗り、後ろに下がつたのだ。

『炎弾……たしかに物騒な能力だな、太陽明里』

『人を狙つて撃つたのなんて初めてですよ？ 悪い子ですね私』

明里は冗談とも本気ともつかないことを言うと、再度自らの身体と同じサイズの炎弾を繰り出す。

王大は額髪を撫でながら、人並みの大きさの炎弾に怯む事も無く、笑う。

「私もこの歳になつて初めてだよ。妖精を使用しての殺し合いは……いや、口に出すと中々に滑稽だな」

鶯鼻が地面を向くように、大きく息を吐く。

「これは、このような圧倒的な戦闘能力差は殺し合いとは言えんな。ただの惨殺だ」

さらに、言葉を続ける。

「もちろん……私の一方的な、だが」

王大が口を数度動かした瞬間、勝負は決着した。

※※※

警報が鳴っている。

通路内どころか、施設内全てを天井部に取り付けてあるパトランプが赤く忙しく照らしだしていた。

おそらく逃げ出した少女が警報のスイッチを押したのだろう。帝は倒れながらも、意識が切れる寸前にそう考えた。

結論から言えば、帝と明里は完敗した。王大が通路内全てを焼き払うほどの直徑を持つ炎弾<sup>ミサイル</sup>を放ったからである。帝は時間回帰で明里だけでも自らの後ろに隠し、直撃することを避けたが、全身に火傷という甚大な被害を被った帝には、王大からの追撃を避ける術は無かつた。

通路内には、帝ただ一人。明里の姿は存在しなかつた。

王大に連れ揚われたのだ。アイツは去り際にこう告げた。

〔質問に答えてやろう〕

帝の身体は、火傷の痛みで口を動かす事も叶わない。

「あの、逃げた新人類の女。あれは私の研究に必要だった」

「モルモットだけじゃ捕らなくてな。新人類なら何人か研究材料に当てても問題ないだろう?」

それが当然の意識であるように、一握りほどの罪悪感すら感じていないのだろう王大が、自らと明里を、空中に浮かしている。

「逃げたあの女は後でなんとかしよう。なに、告げ口をしようが信じる者など何処にもいない」「旧人類であるこの子を実験に使うのは心が痛むが、佐久間帝。お前にアテられたせいもあって発言におかしいところが多々出るようになった」

帝は喉を震わし、発声することが出来ない。他に発言する者もおらず、王大だけが話したてる。

「実験は一週間後に再びこの第一研究機関施設で行う」

「お前にやる気があるのならそこでもう一度話ををしてやろう」

無論、帝からの返事は無い。

「ただの気まぐれだ。短い時間だったが存外戦闘ごっこは楽しめたために、な」

「吹聴して回るならそれも良いだろう。仮に学園に知られたとしても私は一向に構わない」

「その時は学園内の全人間が死ぬだろうがな」

ここまで話をし、反応が無い事に飽きたのかつまらなさそうな顔で顎鬚を撫でる。

『ではまた、来週同時刻に同じこの場所でな』  
やつとの思いで繋いでいた帝の意識が、ここで途絶えた。

※※※

場所は、寮内の自室。

警報を聞き、駆けつけた警備員の働きで病院に運ばれ、妖精による治療によりあの日から三日後には退院する事が出来、四日目の今に至る。

外は、快晴であった。

昼前ののどかな雰囲気。窓から外を見れば、散歩をする人や、アイスクリームの販売車などが街宣機を使って軽快な音楽を鳴らし走行している。

学園内で、あの事件の事は話題になつていてない。

帝は、告げ口をすると全人間を殺すという王大の台詞を脅しと捉え、警察の事情聴取の際にも言わずにいた。逃げ出した例の少女は、口外して回つたらしいが……やはり王大の言った通り、相手にするものもおらず、今は寮に籠っているらしい。

「俺も、似たようなもんか」

帝も退院してからはこの部屋から外には出ず、暗黙とした生活を送っていた。特に意味は無く。Xマークまで他の事をする気が無かつたからだ。登校して、王大を刺し殺してやろうとも考えたが、もし成功したとしても、それでは明里が返つてこない。やはり三日後に迫ったその日。その時に王大を伐ち、明里を救う。これが一番分かりやすく、手取り早いハッピーエンドだ。

ベッドの上には、携帯電話が二つに、電子辞書が一つ。

片方は時間回帰の妖精が入った帝の携帯電話。もう片方は飛翔（ワイング）の能力を持つ妖精が入った、明里の携帯電話だ。

電子辞書には炎弾を繰り出す炎帝<sup>アーフカエザル</sup>。帝の時間回帰（トラベルマシン）は満タンの充電で、三回きりの使用という制限があるが、他の二つは大分長い時間、何度も使えるようだ。

時間回帰の能力は、一度の効果で、対象の空間を15分以前の時間であれば、その間のどの時間でも戻すことが可能だ。

試しに枕をベッドから床に投げる。

中の羽毛が着地の衝撃を和らげたのだろう、ボフッと音と多少の埃をあげて、床に居座る。

帝は時間回帰を持ち、何事かを呟く。

すると床に落ちていた枕がいつの間にかベッドの定位置に戻っていた。その枕に頭を預け、シミ一つ無い真っ白な天井を見上げ、思案する。

明里は、連れ去られる前に二つの妖精を帝に託し、こう言つた。

「敵は伐つてくださいね」

まるで死を決めたように、笑顔で、彼女は泣きながら告げた。

「面白い冗談だ」

敵を伐つつもりはない。強いていうならお仕置きだ、自分はあるの驚異に罰を与えるだけだ。

勿論、死闘の後は明里と二人でここに帰つてくる。

遠くで電子音が奏でられた。おそらくは午前最後の授業の終了を知らせるチャイムだろう。

天気は良好。涼しい風が優しく世界を撫でる。

帝の心だけは、怒りに荒れ。到底、この世界が優しいものには感じられなかつた。

### 佐久間帝の【回答】

あの日から一週間後、時計の針が真上より少し左に傾く時刻。太陽明里は、例の通路に立つていた。

通路内はあの時のまま、破壊された壁が瓦礫となつて無惨にも散らばつている。死体が転がつっていた場所で、明里と――王大恵が対峙していた。

「王大先生、余裕綽々といった風ですね」

「君には、この余興が終わり次第、実験に協力してもらう」

「あれ？ 私の覚え違いでしようか。協力つて、誘拐して強制的に実験の材料にする事を言うんでした？」

「君は……こんな時にも相変わらずだな」

これからそれぞれの思惑がぶつかる死合いが始まるというのに、緊張感が感じられない。

これは明里の性格がそうさせているのだろう、王大も、一週間の中で数多くした口論で、ついにはこの女生徒を観念させる事が出来なかつた。

「さて、ヤツは来るかな」

「来てくれます」

「どこからそんな自信が湧いてくるのだか」

「『自信』ではなく、『信頼』です」

「ああ言え巴こう言う、というか……君を言い合いで負かす自信が無いな」

「負けを認めますか？」

「ああ。私の負けだ」

端から見ると、教師と生徒が楽しくお喋りをしている様に見えるだろう。明里は近くの瓦礫に腰を起き、王大は両腕を組み、少女を見下ろしている。

「先生つて本当は良い人だつたりします？」

「……どうしてだ」

「なんとなく。実は、過去に新人類に何が……そう、大事な人を殺された経験があつたり」帝が目の前に瞬間移動した時にでも眉を動かす程度だった王大が、一度瞬きをし、明里を軽く睨んだ。

「……やはり君は優秀だな。想像ですら的確だ」

その言葉に何かを感じ取ったのか、明里は腰を上げ、王大の睨みに視線をぶつける。

「そういう過去があつても、情状酌量の余地は無いかもですよ」

「手厳しいな、だがそれで良い」

「でも……同情は出来ます」

「…………加えて寛仁とくれば、いつ世に出しても恥ずかしくない生徒だ」

カツン、カツン。

瓦礫の向こうから明里には良く聞き覚えのある足音が聞こえてきた。それは淀み無く、強い意思を持つて歩を進めて来るのを感じる。一種の心地良さも伝わってくるものだった。

「さあ、時間だ」

そう言って王大が風を操り、明里を後方に浮かす。

昼を告げるチャイムが轟いた。それが、死合い開始の合図かと聞き間違うほどに、丁度良いタイミングだった。

どうとう瓦礫を越え、王大の目の前には待ちかねた来訪者の姿が。

「余裕綽々といった風だな、王大」

「そう見えるか？緊張しているんだがなこれでも」

「減らず口は相変わらずだな」

「お互いに、な」

先ほどまで明里が座っていた瓦礫。それが崩れ落ちたのをゴングに、お互いの思惑をぶつけ合う死合いが始まった。

※※※

先手を取ったのは帝の方。

炎帝の能力で炎弾を途切れなく撃ちつけた。が、その炎弾も王大が起こした風により、上下左右に吹き飛ばされる。

軌道を変えた炎弾が壁に衝突した。天井は崩れ、壁には大きな穴を穿ち、床は砕け、底が見えない程の深い穴が出来てゐる。ファーストコンタクトがこれだ。この先の戦いが壮絶なものになるであろうことは想像に容易い。

「良い機会だ。私の妖精を紹介しよう」

「冥土の土産つてやつか」

「これから死にゆく者への手向けだ」

王大が口を動かす。なにかを呟いたのはわかつたが、それが何かは新人類である帝の目をもつてしても読みとれなかつた。

王大は腕時計をちらつかせる。

「この電子時計に飼つてゐる妖精は異常気象アブノーマル・ステータスといつてな、風や雷、雪、火元さえあれば炎だつて操れる」

王大がまた、小さく呟くと、帝から見て右側の壁を指差す。

帝が視線をやつた瞬間に、壁が放電と共に碎け、弾け、吹き飛んだ。「これは雷……要是は威力調整をしたからこの程度で済んだ」と、発言した王大の頭上には小型の積乱雲が浮いていた。

さすがに帝も油汗が出る。風を操る程度の能力だと思っていたが、まさかここまで強力なものだとは、

「何でもアリだな」

「それが、妖精だ」

妖精の存在は今の二人の会話が全てだ。帝は過去に妖精を作り出した人物に、心からの賞賛と感嘆。併せて一発ぶん殴つてやりたいとも念じた。

だがそれでも、そんな強大すぎる敵が相手でも帝は構わずに炎弾を仕向ける。飛翔を使い、高速で王大の頭上、または背後に移動し攻撃。防御に徹しさせる。休む暇を与えない。

勝機があるとするならば、王大の油断だ。その隙を突くしかない。後はその隙が出来るまで。初老に至る年齢の王大患もいつまでも動き続けられるはずはないだろう。あわよくば、こちらの攻撃が当たれば儲けのものだ。

「佐久間帝。炎、雷と統けば、次はなんだと思う」

全くもつて、敵ながら王大の身体能力には、新人類である帝も舌を巻く。この猛攻を受けながら、頬毬を撫で、会話をしようというのだ。

「さあな。後は……雪くらいか」

「正解だ。褒美に極寒をプレゼントしよう」

「こつちには炎帝があるんだぜ？ちょっとやそとの冷気じゃあ相手にならねえな」「では、一筋縄ではない冷氣だな」

「前言撤回。雪は勘弁だ」

「男なら発言に責任を持つ」

「王大が呟く。そして後方にバックステップ。燃えた瓦礫の炎を操り、炎壁を創る。

「佐久間帝。雪というのはどこで創られる？」

「こんな時に授業かよ、……そりゃあ空に浮いてる雪雲だろう」

「そう。では——」

「……おい、待て!?」

帝も王大に真似て炎壁を造ろうとするが、炎弾を繰り出す能力である炎帝に、壁の精製など出来るはずもなく、

「40℃以下の寒気団だ。地上にしながらにして、真冬の上空の気分を味わわせてやる」

「本当、生徒冥利に尽きるな」

炎帝が炎弾を繰り出す間も無く、小規模の寒気団が帝の頭上から落下してきた。

「終わったな」

勝利宣言ともとらえられる王大の発言。炎壁を前に動かしながら、寒気団に近づく。

「み、帝さ……」

「さしもの太陽明里も、この絶望的状況では『信頼』も費えるだろう？」

王大と共に寒気団の中の帝へ近づく明里。王大に話しかけられハツとし、自らの頬を大きく平手打ち。目には炎壁の火が映り込み、それは信頼の炎が、潰えずに燃えているようにも見えた。

「いえ、私は彼を信じています」

それは、王大をもってしても揺らがせる自信が起こらない程の、強い、力強い瞳であった。

王大は息を吐く。

「でももう良いだろう。寒気団を消す。君はその中に倒れる佐久間帝を見ても今と同じ事が言えるだろうか」

王大の唇が震える。すると寒気団が消え、冷気が通路内を充満していく。炎壁を使って通路内の温度を上げた。炎壁も消滅し、明里は帝の元へと駆け寄る。

その場に、佐久間帝の姿は無かつた。

理由を考えたが、床に空く大きな穴が明里に嫌な想像をさせる。

「落ちたか……この深さだ。翔べる能力も持っていたようだが、この穴の直径では翼を羽ばたかせる事も出来まい」

王大が中を覗き込む。確かに、底の見えないこの穴に落ちればひとたまりもないだろう。

「っ!?」

王大は気付いた、左側に明かりが灯つた事に。咄嗟に身体を動かし、襲い来る炎弾から身を遠ざける。

「避けたか、すげえな。ったく」

「そういうえば横にも穴が空いていたな……そこに隠れたか」

左側に空いた通路に、佐久間帝がいた。息は切れ切れに、体力の消耗が見てとれた。

「だが、袋の鼠だ」

王大が腕時計を撫でる。

「こちらもあと一発が限度らしい。一週間前と同じ技で仕留めてやろう」

「あのバカデカい炎か。やめてほしいね」

「嫌だと言つたらどうする?」

「ここにきてつまらねえ常套句だな……そんなの決まってるだろ」

一時の間も置かず、巨大な炎弾が帝に向かつて飛んでくる。それは、あたりの壁も燃や

し尽くし、王大に勝利を確信させる防御を許さない、最強の一撃。

「避けれないのでなら消すまでだ!!」

王大の炎弾が帝に襲いかかる。極限まで近づき、帝の髪の毛を焦がす一寸の距離に近づいた時、

炎は一瞬にして、消滅した。

「どういうことだ……」

王大は理解が及んでいない。どうして炎が消えたのか。なぜ一週間前のあの時、帝が突然目の前に現れたのか。脳裏に色々な疑問が一気に膨れるが、その答えは今、出ない。

「さうきのが終わりの一撃だつて言つたな」

にじり寄る帝。後方に下がる王大。

「油断したな王大、お前はこれで終わりだ」

「くっ！」

『つ!』

王大が明里を羽交い締めにする。明里は身動きがとれず、同時に帝も歩みを止める。

「王大……」

「まさかここまでやるとは思わなくてな。最終手段というやつだ」

ここにきて、最悪の状況になってしまった。この手を使われたその時点で帝の負けは確定。

ゲームバランスを無にする最悪の一手。

「佐久間帝、こちらまで来い」

帝の目には王大、そして明里しか映っていない。

「お前の持つている炎弾を繰り出す妖精、それと飛翔能力を付加する妖精。瞬間移動に使つたやつも、先ほど炎を消したやつも全部だ。全部出してこちらへ投げろ」

帝は大人しく、炎帝と飛翔を取り出す。それを王大の足元に投げつけた。

「二つ? 二つだけか?」

「ああ、あんたと同じで複数の能力を持っているタイプなんだ、それで全部だ」

「……まあいい、この携帯電話が炎弾の方だろう。お前が使う時に必ず握っていたからな」

言うや直ぐ様、王大が帝の足元に向けて炎弾を撃つ。

「ちいっ!」

「帝さん!!」

床には穴が空き、帝は落ちてしまわないように指を穴のヘリに引っ掻けて、なんとか体勢を保つている。

「太陽明里、これも一つの決着だ。」

明里は王大の手から放たれる。しかし、背中を押されて帝と同様に穴へ落下しそうになるところで上半身を引っ掻けた。だが力の無い明里だ、上半身だけで身体を支えるこの体勢は

長く続かないだろう。

「正直に言おう。私は新人類の能力は認めている」

「今さら、なんの話だ」

「まあ聞け、だから指を引っ掻けただけのこの体勢からでも這い上がるの容易だらう?」

帝は、内心舌打ちをする。確かに這い上がる自信はあった。が、追い討ちが来ればそれも不可能だ。

「どうする? 新人類のお前なら片腕で太陽明里だけでも押し上げる事が出来るんじやないか?」

確かに、それも出来るかもしれない。だが、それでは再び王大に捕まるだけだ。状況は改善しない。

帝には、あと二回時間回帰を使う事が出来る。自らと明里を地面の上に戻すか……それはやはり王大の炎弾を食らうだろう。考えろ、なんのための脳みそだ。こういう時の為に使えないでどうする、こんなどうしようもない頭脳のために迫害された覚えはない。最低限、明里を助け出せばそれで良い。あとはどうなつても……

そこで気付いた。ようやく気付いた。現状を打破する一手。

帝は笑みを浮かべた。

※※※

「明里、一週間前の朝の事覚えているか？」

「……う、うん」

「今の状況、あの時と全く一緒だな」

ニカッ、と笑う帝。その笑顔に言い知れぬ不安を感じる明里だが、今は、この佐久間帝といふ男の声に耳を傾けよう。そう決めた。

「なにを話している？」

王大の問いかけにも、応えない。これが最後の会話だと、帝は決めていた。そして、それは明里にも確かに伝わっていた。

「俺たちの研究テーマは、旧人類と新人類の共存は可能か。だつたな」

「うん」

「俺は今なら断言出来る。共存は、可能だ」

「う、ん」

帝は笑顔のままで、悲観なところなど何も無く。ただ、未来を語る。

「で、崖から落ちそうになつたらってあれさ」

「……」

明里は声があがらない。帝の笑顔が別れを告げていると、確固たる気持ちを持つていてることがわかる。自分がなにを言おうと、笑つて言うことを聞いてくれない。やだ、やめて、と。「俺に危険が及ぶ可能性がある変わりに一人を助け出せるつてあれもさ」  
「う…………ん」

「俺の命で大好きな人間を救えるなら、そんな簡単で、嬉しい事は無い」

「ば、か…………帝さんの、ばか」

「だからさ、お前と出会えて良かったよ。同じく行動を共に出来た旧人類が、太陽明里で俺は良かつた」

「……っく」

涙が止まらない。帝が助からないなら自分も、と言おうと思ったがそれでは帝が悲しむ事になる。けれど助かる自分の気持ちは帝は無視だ。わかっていても、帝は自分を犠牲にして私を救うつもりだ。ずるい。そんなかつこいいこと…………帝は、なんて、

「悪いな佐久間帝。俺もそろそろキツい。長話に付き合つてやれる余裕は無いからな……落ちろ」

王大の踵が、帝の手に落とされる。

帝は小さく唸るが、それでも笑顔は崩さずに。

「良いか、明里。これが俺の答えた。佐久間帝は共存は可能だと信じる。なぜなら俺は明里

と「人で楽しかったからだ」

「わた、しも……わたしもたのしかつ——」

樂しかった。そう言い切つてしまふと過去系だ。自分と帝はこれまで、そしてこれからも仲良く、楽しくやつていてる。そんな未来が待つていて。そう、今でも信じている。

「だからな、明里』

「……う、ん』

「今まで、ありがとうな』

「……こち、ら二、そあり、が……とう』

「ああ。やつぱり可愛いなお前は』

帝が胸ポケットへ手をかける。そこには時間回帰が入つてゐる携帯電話。

「なにをする氣だ?』

帝が、なにかを呟く。

「帝さん!!』

明里の周りに七色七つの光球が出現し、衛星軌道上に回る。手を伸ばし、帝を掴もうとする明里に、帝は手を振つた。

「お別れだ』

虹色の花火が上がる。

その場に明里の姿は無く、帝は最後の命令を時間回帰に通達する。

「太陽明里はどこにいった!! なにをしたんだ!!』

「共存をテーマに研究を進めていたあんただ。まるつきし新人類が嫌いだつたわけじやないんだろう……』

「佐久間帝!』

「あんたが初めて会つた新人類が、もし良いヤツだつたらこんな顛末にはならなかつたかもな』

「なにを……』

「あの世で仲良くやろうぜ、先生』

帝と王大の上部に七色七つの球体が発現する。球体は色味を増しながらも、天井付近の広い範囲を回り始める。

「最後に俺からも教えておく』

「この能力は時間回帰といつてな、指定した物、空間を十数分前の状態に戻せるんだ』

球体が、高速で回る。

「15分前、あの空間にはなにがあつた?』

「おい、やめろ……』

「嫌だと言つたら?』



「くつ、くそ！」

「言葉遣いが汚いぜ——40℃以下の寒気団。あんたにも味わわせてやるよ」

王大はこの場から逃げるために走ろうとした。が、帝に足首を捕まれ、手についていた携帯電話も床に落とし……。

時既に遅し。

命を摘む極寒が、二人を容赦無く包み込んだ。



拝啓

暑さ厳しき折、梅雨も明けて間もないですが一雨欲しい今日この頃。母上様もご多忙のことと存じます。

なんて。

堅苦しい手紙なんてお母さんも読んでいて苦痛に違いない。と思い、普通に話し言葉で書き列ねていくよー。

どうも。=一度目はご免被ります、命が危険に晒される事=明里です！

本当、最近暑くなってきたよねー。太陽さん本気出しそぎだよ！もう少し休んでも良いと思うなあ私は。

でね。ここからが本題なんだ。私が協力している第一研究機関についてだけど……。

潰れました！お役御免です！事業仕分けでは無いんだけどね、ちょっとこここの偉い人がご乱心しちゃって……うん、研究自体無くなつたんだ。でもね、

もう研究結果は出たから！もう初めから私が言つていた通りだよつ。

=旧人類も新人類も友情も愛情もみーんな共、有出来る同じ人類なんです！=

はいつ簡単だつたね。これからも私、太陽明里は勉学に励み、青春を謳歌する事を誓います！

いい？お母さん。=人類みな人類=うちのクラスのスローガン。回覧板にでも書いて回しておいてね！

じやあ、またね。最近大切な友達を亡くした明里だけど。楽しくやつてるから……。

【でわでわ、悪魔的な猛暑をご無事に過ごされるよう祈つております】

太陽明里は病室にいた。

5Sが行き届いているのだろう。アルコール臭い匂いが、いま自分がいる場所が清潔であり、清潔である事を義務付けられている特殊な空間である事を実感する。

精神のケアを含めて、この病院にはあれからごやつかいになつてゐる。窓からはアイスクリーム屋が軽快な音楽を鳴らし、走行しているのが見えた。時刻は朝ごはんの帯を少し過ぎたくらい。明里は大きく伸びをして、憂いな目線を虚空へ向けて了。

「愛するあの人を亡くして、この歳で未亡人かあ」

「だれが死んだって？」

「あら、『帝さん』お元気ですか？」

「ここは俺の病室だ！　お前は診察を受けたらさっさと帰れ！」

……このやり取りを見てもわかる通り、佐久間帝は死んでおらず、概ね元気であるよう見えた。

帝は青白い病衣を纏い、ベッドに座っている。明里がここにいる理由はといえば、見舞いもそうなのだが、自身のメンタルケアのため、通院のついでに帝の病室に顔を出したという次第だ。

明里が林檎の皮を、果物ナイフを使って丁寧に剥ぐ。「はいっ」と言つて渡してくれたのは八つに切ったわけでも、兎型に可愛らしく細工したわけでもない、ただ丸ごとの皮だけ剥いた林檎であった。

「いや、まあ……丸かじりは嫌いじゃないから良いんだが……」

「珍しい？　我が家は代々これなの」

「代々ときたか……歯茎の丈夫な血筋なんだな」

「代々、ブラークコントロールが完璧なんだよっ」

えへん、と薄い胸を張る。

「相変わらずの幼児体型だな」

ん？　と帝は怪訝な顔をする。自分で口にした事だが、口にするつもりは無かつた。要は思

考だけに留めていたものを発言してしまったのだ。

恐る恐る明里の方へ首を回す。そこには、普段通りの、笑顔の明里がいた。

「…………ひどい」

「へ？」

「気にしてる、のに」

「明里さん？」

「帝、さんのは、ば……」

笑顔が瞬時に悲哀に移り変わる。王大戦で泣いていた時よりも、明里の表情は悲しそうなものだ。精神が強く揺さぶられている、視線が動かずに唇の震えが大きなものになつて――

――やバい、泣く。

このままにしていたら確実に訪れるであろう惨事に、帝は恐怖色の焦りを覚える。どうするか、近づく最悪の未来を変えるにはベッドの隣にあるテーブル、そこに置いてある携帯電話――時間回帰を使うか……いや、駄目だ。これを使う機会は無いに等しい。決めたのだが、次に使う時は再び誰かを守る時だと。

と考えている内に、守りたい誰かの中の一人であるはずの明里が泣く数秒前まできていた。何かアクションを起こさねば。その一心で帝は口を開いた。

「明里！」

「……？」

「俺がどうやつて生還したか聞かないのか？」

「…………知りたい」

よし！ 別に隠しておいたわけではないが、なんとなく言いそびれていた事だ。

明里がヘッドに上がり、帝の伸ばした両足の間に正座した。なんともウキウキとした雰囲気を出しているものか。水飴を持たせば、20円で紙芝居を観覧する昭和のチビっ子そのものの、期待に満ちた表情だ。

これだけ反応が良いと、話し手も気分が良くなるというもの。テーブルの上から紙に包まれた飴を一つ取り、チビっ子に渡す。

「ほれ、飴だよお嬢ちゃん」

「ありがとーおじちゃん」

誰がおじちゃんだ。

ふむ、まずはどこから話そろか……。

「寒気団に包まれた時、どうやって脱出したのー？」

チビっ子になりきっているのか、素でなのかわかりづらい完璧な子ども喋りをする明里。

「うーん、少し違うな。脱出したんじゃないんだ」

「脱出じやない？」

「『消した』んだ。寒気団をな」

「消した……、でも」

「時間回帰は回数限度に達していて、寒気団を無かつた時間に戻す事は出来ない」明里はそう言いたいのだろう。上目遣いで得心のいかない気持ちを視線に乗せ、帝に浴びせる。

「お前の言いたい事はわかる。確かに時間回帰はある時使用不可能だった」

「じゃあ――」

「どうしてかつて？ ……寒気団を作り出した妖精。その妖精の力を使ったんだ」

「あれ？ たしか、王大先生の妖精って、最後の炎弾を撃つた時に残量電気を使い果たしたんじや？」

「その通り、あの炎弾でエネルギーを使い果たした」

「ならどうやつて？」 そう言いたいのだろう。眉間に皺を寄せるようになるが、如何せん、明里の童顔では真剣さが伝わってこない。

「事實として、炎弾発射時にはもう他の能力を発現させたり、発現したものを消したりするエネルギーは王大の妖精には残っていなかつた」

「だから、ならどうやつて？」

「最後の力を使つて繰り出した炎弾。その炎弾はどうなつた？」

「どうなつたつて……」

明里は記憶を紡ぐ。王大が炎弾を打ち出し、その炎弾は帝目掛け——「あっ」と、明里がハッとした声を上げた。

「そうだ。俺の妖精、時間回帰の能力で、元にあった場所へ戻したんだ」

「大事なのはここだ、『消した』ではなく、『戻した』。これで解るだろうと言ふ帝に同調し、明里は理解したという合図に首をコクコクと振る。

「実はあの時、炎弾を撃つにあたり、使用されたエネルギーは、王大の妖精の元に戻つて、いたんだ」

「ほえー……先生が気づかなくて良かつたねえ」

「あそこでも駆け引きがあったんだよ。消されたとなれば、力を使いきつて出した後に、すぐ電気残量をもう一度確かめる可能性は低い」

「——それで、だ」帝が得意気に右手の人差し指を立てる。

「寒気団が落ちる前に俺は王大を捕まえ、あいつの妖精が宿る腕時計に触れようと必死に足搔いたってワケさ」

「……上手くいって良かつたね」

「火事場の馬鹿力……いや、冬場の馬鹿力ってやつだろうか。きっと凄い力だったはずだ」

帝はベッドの上から窓に向こうに見える入道雲を眺める。いま自分がここにこうしている奇跡に感謝をしたい。誰に?もちろん神なんかではない。

「寒気団を消した後は、自力で穴からよじ登つて、そこでぶつ倒れた」

「さすがにあれだけ騒ぎを起こしたら警備員も来るよ。本当、生きていてくれて良かつた」

「明里……」  
室内の雰囲気が、張りつめたような甘いような、居心地の悪い心地よさに変化した。

だが、

「そういうえば王大先生ピンポンしてたよ!」

ニコニコと楽しそうにムードをぶち壊す明里。クラスのムードメーカーは、同時にムードクラッシャーであった。

学園内の警察。もしくはさらに深い暗部の病院に、王大は隔離されている。明里は何らかの、妖精を使った通信手段で容態を確認する事が出来たのだろう。まあ、殺し合いをした相手に言うのもなんだが……生きているなら良かつた。

気づいたら入道雲は流れ、見事な青天が空に広がっている。帝は、今が幸せなんだと再確認をした。

「あと明里、その手紙だけど、最後に敬具が足りないぞ」

「……あつ、そうか」

明里は恥ずかしそうに後頭部をさする。

帝は落ち着いた表情で再度、窓からの景色を堪能する。空は青に、建物は白。空と地面の

境界線がはつきりとした空間、それが今は自分に安らぎを与えてくれる。

復校は早めにしたい。旧人類と新人類、関係なくバカ話をし、体育では身体を思いつきり動かしてやろう。

もし……可能性は限り無く低いが。王大恵が復職し、帝の道徳の授業を受け持つなら、今度は始めの内くらいは話を聞いてやろう。もしかしたらアイツも考えを改めているかもしれない。

そして、口の中で飴を転がしながら景色を眺める明里を見る。

この短い期間で随分一人の距離も縮まつた。おそらくはクラスの誰よりも、明里と自分との距離感は近いものになつていて。

第一研究機関が休止状態になつていているために、ペアで行動する機会も無くなるが、それでも登校時は一緒であろうし、昼飯もまた、一緒なのだろう。

明里が帝の視線に気づき、振り返る。彼女も色々と思いを巡らせたみたいだ。瞳を見るだけでわかる。明里は帝と同じことを考えていたのだと。

明里が太陽のような眩い笑顔になる。

「帝。これからもよろしくね」

太陽の日射しが、室内を更に明るく照らす。

「ああ、こちらこそ。よろしくな明里」

どこから入ったのか、ほんのり冷たい、優しい風が二人の肌を撫でる。

「呼び捨てって、なにか不思議な気分になるね。ちょっと恥ずかしいけど、嬉しいような。帝は逆に敬語を使ってみたら?」

「それは……つまらん冗談だな」

つまらない。とは言つたが、超快晴の空。白い建物に、白の地面。七色に輝くプリズムに溢れた世界で優しさを感じながら――

――幸せを享受し、届託の無い笑顔を浮かべる帝の表情が、そこにはあった。

了